

魔王を倒したので元の世界に帰ります

柚子檸檬

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

平凡な生活を送っていたが、ある日突然異世界に召喚されて、仲間たちと共に魔王を倒した少年『筑紫 春』

しかし魔王を倒しても元の世界に帰ることは出来ずに帰る方法を頑張つて探すために

果たして彼は様々な誘惑を振り切つて元の世界に帰ることは出来るのだろうか？

## 目次

エピソードだけどプロローグ	1
この世界には誘惑がいつぱい	6
ダンジョンには危険がいつぱい？	10
異文化交流には発見がいつぱい	17
結婚式は幸せがいつぱい	23
デートには懐かしいがいつぱい	29
最終話 さようならにはありがとうがいつぱい	37

## エピソードだけどプロローグ

俺の名前は筑紫春<sup>つくしハル</sup>。自分で言うのもなんだけど何処にでもいそうな高校生だ。

そんな俺は現在。

「フハハハハハ！ 矮小な人間どもがよくも我の前まで辿り着けたものだ！」

魔王と戦おうとしている。

苦節2年、ここまで来るのに長かった。いや短いのか？ 突然異世界に召喚された俺は王様に魔王を倒してくれと頼まれて、強い仲間を集めて、強力な武器や防具を探し、数多くのダンジョンを踏破し、魔王幹部をほぼ壊滅させ、ようやくここまで来た。元の世界で武術でも習っておけばよかったと思った回数は数えきれないし、死にそうになった回数は18回目を最後に数えてない。多分同じ事をもう一度最初からやってみると言われたら泣いて駄々を捏ねる自信がある。それくらい奇跡に奇跡を重ねた結果だった。

そうこうやってるうちに魔王との最終決戦はクライマックスを迎えていた。

「フハハハハハ！ 所詮貴様らなど我の足元にも及ばぬ存在よ。さあ、勇者よ。後は貴様だけだぞ？」

「クツ、アイザック……ホリイ……シルヴィア……」

苦楽を共にした三人の仲間は魔王の攻撃を受けたりしてとうとう倒れてしまう。俺もそろそろ体力の限界だ。これ以上長引けば勝機は無い。次の一撃で決めなければ。そう思いながら剣を構えて突撃を始める。

「うおおおおおおおー！」

「フハハハハハ！ 特攻か、その意気やよし。しかし我にそんなものが通じるとでも……むっ!？」

ここにきて魔王は気づく。倒れていた筈の僧侶、ホリイが這いつくばりながらも呪文の詠唱をしていることに。彼女は最後の魔力を俺の強化に回してくれたのだ。

「猪口才なあ！ 魔の雷を食らうがいい！」

魔王から放たれる魔の雷。攻撃に全ての力を使ってしまった俺に避ける術は残されていない。

「フハハハハハ！ コレで終わアアアア!?」

魔王の手には飛んできた短剣が刺さって魔の雷がキャンセルされ、足には大剣が刺さって身動きが取れなくなる。アイザックとシルヴィアが最後の力を振り絞って突破口を開いてくれたのだ。俺は3人に報いるべくすべての力を振り絞って更に加速する。

「これで———終わりだああああ!!」

何の工夫も無い我武者羅な突きが魔王を貫き、どつてっ腹に大穴を空ける。

「こんな……バカな……」

某特撮の如く魔王は派手に爆発四散して消滅。第2形態なんてものは無く、後には何も残らなかった。

俺達の勝利だ。



「勇者たちよ、よくぞ魔王を倒してくれた。心から礼を言う」

魔王を倒した後、魔王が隠し持っていた秘薬を見つけた俺は自分で試して体力が回復し、傷が治ったのを確認するとすかさず3人にも使用してパーティーは完全回復を果たす。そしてホリイの転移呪文によつて王都に帰還した。

民たちは完成を挙げて俺達を迎い入れてくれて、国王も俺達の帰還を確認するなり御前に呼び出して礼を言うのだった。

「なんなりと褒美を取らそう。何でも言ってみよ」

「じゃあ、俺を元の世界に帰してくれませんかね」

「……それ以外で頼む。それ以外だったら本当に何でもいいから」

元の世界に帰して欲しいというのは召喚されたときにも言ったが、王曰く、俺を召喚した魔法では召喚は出来ても送還は出来ないというクソ仕様らしい。

「何だったらうちのお転婆姫を——」

「でしたら王都から離れた場所に家を貰えませんか。そこを拠点にして元の世界に帰る方法を探したいのです」

王様が何か言いかけてたが気にしないことにした。ちなにみ国王の一人娘、すなわちお姫様は栗毛色の髪が綺麗な美しい女性だが、お転婆なのが欠点で城の石壁を素手で破壊しては外に遊びに行つて国王も困っているのだ。

一時期無理矢理魔王討伐の旅に付いてきたこともあった。巨大ゴーレムを素手で破壊したり、巨大トロールにアツパーカットを食らわせて昏倒させたり、とある魔王幹部が創った合成魔獣をラツシュで叩きのめしたりと、もう全部あのお姫様だけでいいんじゃないかなと思わせる暴れっぷりを見せてくれた。国王が病で倒れたという知らせが来なかつたらきつと魔王戦に彼女が参加してたかもしれない。

そういえば王族は第何王子、第何王女みたいに王位を継ぐ候補が何人もいるイメージがあるのだが、この国は彼女一人だけでいいんだろうか。

その後、アイザックは今後入用になるからと金を、ホリイは自分が育ったオンボロ修道院の建て直しを、シルヴィアは魔王戦で駄目になった武器防具の新調を要求し、無事通つたのだった。俺が要求した拠点についてはゴーレム技師を動員して3日後には完成させると言っている。それまでは今まで通り宿屋暮らしになりそうだな。

「そういえばアイザック、入用って実家に仕送りでもするのか?」

城からの帰り道、ふと気になったことを聞いてみる。魔王城から宝を持ち出したし、今までの成果と合わせれば四等分にしても数十年は遊んで暮らせそうな金額にはなるだろう。

「……そういえばまだ言っていなかったな。ハル、俺が魔王と戦う直前に言った言葉を覚えてるか?」

アイザックは魔王との戦いの直前に「俺、魔王を倒したら故郷に帰って結婚するんだ」と言っていた。何故この局面になって態々死亡フラグを立てるんだよと叫びたい気持ちになった。魔王戦の間もアイザックの事が気になって仕方なかった。

「俺、ホリイと結婚するんだ」

「へ？」

「勇者様、今まで黙ってて申し訳ありません」

「マジかよ……マジかよ……」

知らないうちに仲間二名がリア充になっていたでござる。思い返してみれば最近二人の距離が近いような気がしたし、休暇の日には二人が知らないうちに消えて、シルヴィアと二人で過ごすことが多かったような気がするし、飯を食う時も二人が隣通しだった気がするし。

「それに……」

「ええ……」

二人は二人でしか通じ合えないであろうアイコンタクトで頷いた後、視線をホリイの下腹部へと向ける。

「……えっ、マジで？」

「ああ、まだ間もないがホリイには分かるらしい」

しかも仲間一人が妊娠してたでござる。言いにくいのは分かるけど言ってくれよ、妊婦さんを最終決戦に連れていくとか俺つてとんだ鬼畜野郎じゃないかよ。割と魔王の攻撃食らってた気がするけど、生まれてくる赤ん坊に何かあつたら罪悪感で死ぬる自信がある。

言いたいことはたくさんあるが、あえて一言言うとしたら。

「おめでどう、二人とも幸せになつてくれ」

苦楽を共にした仲間達の幸せを願わずにはいられない。「こちとら必死過ぎて恋愛なんてしてる暇なかったんだが？」とか「清楚金髪巨乳美人をさらつとゲットしたとか羨ま死ね」とか「俺より先にDT卒業しやがってモゲロ」とか決して思っていないから安心して欲しい。

「大丈夫かハル、物凄い邪念を感じるんだが……」

「ナンノコトカナ、シランヨ」

「そ、そうか」

既に二人の世界を築き上げている二人は気づいてなかったが、感のいいシルヴィアはそうでもなかったらしい。それに誤解だから安心して欲しい。親友に邪念を向けるわけじゃないじゃないか。

「それですぐにも親父とお袋にホリイを紹介したいから今日にでも

故郷に向けて出発するつもりだ。式についてはおいおい知らせるか  
ら絶対に出てくれよな」

「アア、ワカッタヨ」

「それでは暫しのお暇を頂きます」

「あんまり無理しないでねー」

笑顔で去っていく二人の背中が心なしかいつもより遠く感じる。  
この気持ちは言葉にするのであれば何て言えばいいんだろうな。

「元氣出せ、私がいる。肉でも食いに行こう。向こうに美味いケバブ  
を出す店があるからさあ行こう直ぐに行こう」

「お前はいつも通りだねえ」

目の前にいるちよつと食いしん坊な銀髪のダークエルフは微笑ん  
で俺の手を引く。相変わらず力が強いなと思いつつながら苦笑いした。

いつもは武器、防具、回復ポーションのための節約生活だったがも  
うその必要はない。今晚くらいは祝勝会兼友人達の結婚祝いと称し  
て飲んで食べて騒いでも罰は当たらないだろう。

ちなみにシルヴィアお勧めのゲバブはタレが絶品で滅茶苦茶美味  
かった。



この世界には誘惑がいっぱい

「はあ、異世界に通じるものに関連した情報ねえ……」

仲間二名の電撃入籍事件から二日、やはり情報収集は大事だということで俺とシルヴィアは現在、路地裏で待ち合わせていた情報屋に問い合わせている。

ちなみに昨日は二日酔いで丸一日潰れた。シルヴィアも同じくらい飲んでいた筈なのにピンピンしている。やはり種族の違いは大きいのか。

情報通のラットと言えばこの界隈では有名人。噂では政治家の汚職から酒場にいるウエイトレスのパンツの色のローテーションまで何でもござれな情報通らしい。事実、今までの旅でラットに助けられた回数は数知れない。

「七色に輝く魔石、稲妻を纏う魔剣、精霊の加護を受けた鎧等々と結構な情報を仕入れていやすがそういった情報はございやせんね」

「やっぱりかあ……」

そんな彼でも今回の要求には難色を示した。彼で駄目となると他の情報屋を当たってもいい情報を期待できないだろうなどがつくりと肩を落とす。

稲妻を纏う魔剣とやらに俺の中の男心が刺激されるが、さほど重要な事ではないので今は置いておく。でも、することが無かったらちよつと探しに行つてもいいかもしれない。

「しつかし何でもまた異世界へ？ この世界を救つたらまた別の世界でも救うおつもりでやすか？」

「まあ、そんなところだよ。ほら」

そう言つて呼び出し料として銀貨を三枚ラットへ渡し、「毎度あり」と笑顔で懐へと閉まっていく。

「あ、そうそう。これはまだ未確定の情報なんでやすが、何でも魔王が討伐されたことで東の島国から使節団がこつちに来るそうでやしてね」

「使節団ねえ……交易？」

「さあ？で、本題はここからでやしてね。何でも使節団の中には過去、現在、未来を見通す巫女がいるとかなんとか」

正直言うと眉唾物だ。その手の預言者やら千里眼の持ち主を名乗る人物は見てきたが、ほぼ全員がそうやって人から金を巻き上げている詐欺師だったし、そいつらを懲らしめて兵士達に突き出した事もある。もしそんな人種の集まりだったらまた面倒な事になりそうだ。



「ハルは元の世界に帰りたいのか？」

ラットと別れた後。行く当てもなくブラブラとしていたらさつきまでずっと黙っていたシルヴィアが突然言い出した。

「そうだよ」

「何故だ？」

「元の世界には家族がいるからかな」

RPGは好きだし、剣と魔法の世界に憧れはあった。でもその世界で骨を埋める気にはならない。今だって両親が俺が生きていると信じて探してくれてるかもしれないと何度思ったことか。魔王を倒せば役目も終わり元の世界に帰れると縋ってたのにこの様だ。

「家族か……」

そう呟くシルヴィアには何も感じられるものは無い。彼女は両親に捨てられたと言っていたから無理も無いのかもしれないな。

彼女は世にも珍しいエルフ同士から産まれたダークエルフ。本来ならそんなことはあり得ないと不気味に思った彼女の両親がまだ幼い彼女を追放。おまけに悪い男に騙されて奴隷として売り飛ばされて、悲惨な人生を送っていたのだから。いくらエルフが排他的な種族だからって自分の娘を追放なんて酷い話もあったもんだ。夢も希望も無いじゃないか。自分の境遇と重なって酷く同情したからこそ彼女を引き取ったのだ。

「それに、もう魔王が倒されたし俺の役割は終わったんだよ。今の俺はこの世界にとって異物でしかないんだよ」

「そんな……寂しい事言わないでくれ。ハルがいたから今の私がある。私はハルがいなくなったら寂しいし悲しい」

「そっか、ありがとう」

シルヴィアが俺の事を好意的に見てくれてるのはなんとなく分かるし素直に嬉しい。でも、元の世界に帰るのだからその気持ちには応えられない。そんな無責任でいられるほど俺は屑になれない。

「ハル、私はハルが好きだ」

「お、おお……？」

「私はハルと家族になりたいと思ってる」

「突然どうした？」

何だかシルヴィアの様子がおかしい。こちらを見てくる眼は嫌になるくらい真剣で熱っぽい。それに俺の手首をギュツと握って断乎として離そうとしないている。というかこんな風にストレートな告白をされるのは初めてで照れくさくなってしまい、思わず目を背けてしまった。

「ハルは私という家族が出来たら帰らないでくれるのか？」

「まず質問に答えて」

「答えたぞ。私はハルが好きで家族になりたいと思ってる。魔王を倒したら気持ちを打ち明けるつもりだったが、アイザックとホリイの件で言い難くなって機会を伺った」

シルヴィアは俺の手首を放すと間髪入れずに俺の腰に手を回した。所謂だいしゆきホールドというやつだ。がっしりと固められて身動きは取れないし彼女のホリイほどではないにしろ充分ダイナマイトボディと言つていい感触が直に伝わる。

「私には魅力は無いか？」

「違う」

「ダークエルフの女は嫌いか？」

「そうじゃない」

「私が元奴隷だからか？」

「そういう事言うの止めろって何度も言っただろ」

「非処女だから駄目なのか？」

「いい加減にしないと怒るぞ。俺はお前にそういうことさせるために引き取ったわけじゃないんだよ」

シルヴィアは魅力的な女性だ。この世界じゃダークエルフはどちらかと言えば魔族側に近い一族だからと嫌われる事も多い。しかし単眼、複眼であつたり下半身が蛇やら馬やらだったりでさえHENTAI国家日本では一つのステータスとして扱われてる。ダークエルフだからなんだ、寧ろ個人的には美人だがお堅いエルフよりもアリだ。

でもシルヴィアをそういう目で見るとシルヴィアを奴隷として扱っていた連中と変わらないような気がしてそういつた気にはなれなかつた。

「……すまない」

口調を強くしたせいとか、シルヴィアは怒られたペットのようにしょんぼりとしてしまった。しかし拘束力は弱くなったとはいえないしゆきホールドは解かれていない。感触は惜しいがいい加減に解かないとちよつと拙い事になりかねない。

「フフフフ」

何か突然笑い出した。

「大丈夫？ 診療所行く？」

「いや、別に頭がおかしくなつたわけじゃないからな。ただ、ハルは私の事を大切に想つてくれるんだと分かると嬉しくて」

あながち間違つてはいないがやけにポジティブだなど、どさくさ紛れに拘束を解いた。「ああ……」というシルヴィアの名残惜しそうな声を振り切つた自分を褒めてやりたいところだ。自分も名残惜しいよ、こんな美女に抱きつかれるなんて多分元の世界に帰ったら無いんだもの。

「だから、私はハルを振り向かせるために頑張る」

不覚にもその笑顔にドキリとしてしまう。今までは普通に接してこれたのに、こんなんじゃないや俺、このダークエルフに即落ちさせられちゃうよ。

ダンジョンには危険がいつぱい？

捜査は足で稼ぐものだど刑事ドラマで聞いたことがある。実際はどうか知らないが、いい言葉だ。それに倣って俺達二人は今までのダンジョンをもう一度隈なく探索してみることにした。

ゲームでもやりこみ要素で既にクリアしたダンジョンに変化があったり隠しダンジョンに通じていたりするのはRPGではよくある事だし、当てもない今、それに賭けてみるのもアリだろう。

「キシャアアアア！」

「ガアアアアアア！」

「ボブアアアアア！」

襲い掛かってきた魔物は俺達二人によつて瞬殺されている。弱いとはいえこうも何度も出現したら流石に面倒だ。ホリイがいたら弱い魔物を近づかせない呪文で戦闘する手間が省けるのだが、仕方ない。次は魔物除けのポーションでも用意しようか。

「にしてもこの辺の魔物弱いな」

「そりゃ、俺とアイザックだけで旅してた頃に行ったダンジョンだしな。でも油断はするなよ」

アイザックめ、知らないうちに抜け駆けしてDT卒業までしやがって。一緒に娼館行こうとか誘っておいて、娼館前で怖気づいて引き返したあの頃のお前はもっと輝いていたぞ。結婚式のスピーチでバラしてやるから覚悟しとけよ。

「何にもないな……」

思わず呟いてしまう程、このダンジョンには何も無い。さつきからゴブリンのような雑魚モンスターばかり出現して何も目新しいものが見当たらない。

「はっ！こ、これは!?!」

「え、何!? 何かあったのか!?!」

「ガラス玉が落ちた。綺麗だぞ」

「よ、良かったな」

無邪気にガラス玉を見せびらかすシルヴィアに俺は曖昧な表情で

返事をするこゝとしか出来なかつた。

シルヴィアの告白兼宣戦布告からしばらく経つ。一応駄目元で身構えてはいるものの、彼女は朝方にベッドに潜り込む以外は特に何も変わったことはしてこない。それだけでも俺の中のナニカがごっそりと削られていくのだが。もし裸ワイシャツだったらやばかつた。

「はっ、これは!」

「今度は何!?!」

「干し肉が落ちてた。勿体ないな」

「貧乏じゃないんから拾い食いはするなよ。というか虫集つてるからな」

昔のシルヴィアは手掴みで食事したり、地面に落ちて土まみれになつた食べ物も平気で食べていた。必死で矯正させたのにその頃の癖がまだ抜けてないんだなあ。

「はっ、これは!」

この気配は天井の予感。

「今度は何だよ!?!」

「パ、パンツの紐が切れた……」

思わず嘔き出した俺はきつと悪くない。

地面に落ちてるパンツだった黒い布、顔を赤らめながらプルプル振るえて服の裾を抑えているシルヴィアの姿はジャブどころか肝臓にボデイブローが入つた勢いだった。あの裾の内側の事を考えると思わず鼻血が出そうだ。恥じらいというスパイスがあるだけでこうも違ふのか。

「と、とりあえず俺のズボン貸すから。向こう向いてる間に着替えてくれ」

バックの中から昨日洗つたばかりのズボンを取り出してシルヴィアに投げつけると透かさず明後日の方を向いて目を閉じた。

帰り道、シルヴィアがちよつと嬉しそうに自分のズボンを履いていと思うと妙な気分になつてしまい、何度かズボンをチラチラと見てしまう。そしてそれに気づいた彼女は何かを察し更に嬉しそうになつていた。よくよく考えたらシルヴィアもパンツの替えくらい

持つてるわけで、それを敢えて言わなかった辺りが最高に策士だ。気付かなかった俺が馬鹿なだけかもしれないが。

もうあのズボンは履けなくなった。



「我が名はヘカトンケイル！ 貴様らに亡き者にされた父、ギガントスの息子なり！ 貴様を殺して我が新たなる魔王となりて——」  
「煩いし長いし隙だらけだし」

——一閃。

さつきからペラペラとくつちやべってたヘカトンケイルとやらは頭から真つ二つとなった。

バトル漫画だと必殺技の名前を叫びながら攻撃するシーンがよくあるけど、実際はそんな余裕はない。魔法を使うのでなければ、無言で歯を食いしばって相手をkill。この手に限る。

「あんたより弱い中ボスは、流星にいなかつたな」

「くつ……うおおおおおおお！ 魔王様万歳！」

そう言い残して特撮ヒーローアニメに出てくる怪人のように跡形もなく爆散して消えた。

「あいつ何だったんだ？」

俺もそう思う。

こいつ何しに出てきたの？ とか、魔王はとつくに死んだのに万歳してどうするんだ？ とか、敵を討つのに長つたらしい前口上は必要だったの？ とかツツコミ所は色々あったが、敢えて言わせてもらえば、

「何で百ヘカトンケイルの手なのに腕が10本しかなかったんだ……」

本編終了後に出てくるボスといえど、魔王ほどではないにしろ結構な強さの敵が目白押しが定石でありながらこの体たらく。

「ここにも何の手掛かりもなかったな！」

「シルヴィアさんや、何でそんなに嬉しそうなんですかね。当然と言えば当然だけど」

カタシアの洞窟、ロトロ遺跡跡地、ギガントスの洞穴、クイーンラミアの巣、天竜の塔とめぼしいダンジョンを周って見たものの見落とされたアイテムがいくつかあっただけでそれ以上の収穫は無し。訂正、さっきの腕が10本しかないヘカトンケイルが隠し持ってた財宝と装備してた魔剣が五本が追加さる。その中にはラットが言ってた稲妻を纏う魔剣もその中であつた。本格的に宛が無くなってしまつて困る。

いやマジで困る。

天竜が天に帰つた天竜の塔はともかく、古代文明の遺産がかなり残つてたロトロ遺跡跡地なら何か手掛かりくらいあると思つてたのに、残つてたのは古代兵器のや壁画の残骸ばかり。畜生、姫様が暴れて遺跡が崩壊しなければ何かしら分かつたかもしれないのに。もう神様のなものを探してそいつに送還してもらうしかないのか。

現実的じゃないな。文字通り神頼みだ。

「もう観念してここに永住したらどうだ？ 金はあるし、家も建つた。それに……わ、私もいるし」

「照れくさいんなら言わなきゃいいのに。それにあれは家じゃなくて仮拠点だから」

仮拠点にするには勿体ない規模だけどな。あれはちよつとした新築一戸建ての建築物だ。あれだけ広いと返つて居心地が悪いし掃除だつて大変だ。

「なあ、シルヴィア。俺に拘る必要は無いんだぞ」

「んん？ ハル、お前は何を言つてるんだ？」

「世界は広いんだ。俺よりもいい男なんていっぱいいる」「ハル？」

「お前にはもつと視野を広く持つて欲しい。この世界に留まる気が無い俺なんかよりも、最初からこの世界にいる俺よりもお前を大切に出来る奴がきつといる。だから、俺に拘る必要なんて……」

次の瞬間、俺の頬に衝撃走る。

殴られたのだ。しかもグーパンで。

「あ痛ッ!?! え？ ええっ!?!」



シルヴィアに殴られたのだ。初めて会った頃は警戒されて殴られたりひっつかかれたり噛みつかれたりする事はあったけど暴力ふるわれるのはそれ以来だ。

「ハルは分かかってない！ 私はハルが良いって言ったのに全然分かかってない！」

シルヴィアは瞳いっぱい涙をためながら俺を睨みつけている。俺は圧倒されて二の句を告げる事が出来なかった。

「何でだ！ 何でハルは私を遠ざけようとする！ こんなにもハルが好きなのに！ 暗い世界にいた私を連れ出してくれたハルが大好きなのに！ ハルがいないと生きていく意味なんて無いのに！ 何で分かってくれないんだ！」

俺は間違っていた。俺はシルヴィアを同情で連れ出した責任を取らなければいけない。だから元の世界に帰った後でも自分だけ生きていけるように俺に未練を残さないようにするべきだと思っていた。それがそもそもの間違いだった。シルヴィアはそんな事を望んではいなかったのだ。

きつと心のどこかで、シルヴィアの好意は雛鳥が初めて見たものを親だと思い込むようなものだと考えていたんだろう。

俺は最低だ。

責任なんて全然とれてないじゃないか。

「…………ごめん」

「謝ってなんて欲しくない」

「でも、ごめん」

「ハルは、結局私の事をどう思ってるんだ」

「前にも言ったけど、種族とか純潔とかで嫌いにはならないし、大切な仲間だと思ってる。それに無責任な事は出来ないし今も思ってる」

「ハルにとっての私は仲間でしかないのか…………？」  
「…………」

正直に言うとは断言は出来ない。女性にこんなに好かれたのは生まれて初めてだ。素直に嬉しいとは思う。しかし、相手が今まで苦楽を共にした大切な仲間だけに下半身で動きたくないのだ。

「じれったいな」

シルヴィアはそう言うのとジリジリとこちらに歩いてきた。俺は思わず同じペースで後ろへと下がります。

「あの、何で距離を詰めてくるの？」

「ハルが後ろに下がるからだろう？」

「いや、その理屈は何かおかしい」

シルヴィアが前へ、俺は後ろへを繰り返していくうちに俺は後ろの壁へと阻まれた。

「要するにハルは無責任に私に手を出すつもりはないのだろうか？ なら私から手を出す分には何の問題も無いわけだ」

「……はいいい？」

シルヴィアがとんでもないこと言いだした。

このままでは拙い。非情に拙い。

「ま、待て！ 早まるな、話し合おう！」

「話し合いならさっきしただろう。その結果を踏まえて私なりに答えを出したのに、おかしなことを言うやつだ」

とうとう二人の距離は零となった。こんな状況でなければロマンチックだったというのに。

そしてシルヴィアは両手でがっしりと俺の頭を掴んで引き寄せてそのまま――

「んむっ」

唇から伝わる生温かくて湿った感触。どっちかの唇が切れたのだろうか、口の中に血特有の鉄の味が広がる。

俺のファーストキスは血の味でした。

「ぶはあー！」

思考回路の大半が停止していたせいで長いのか短いのか分からない接吻が終わる。シルヴィアは魅了チャームの呪文でも使えるんだろうか。彼女の熱っぽい顔とさっきまで俺の唇と重なっていた薄いピンク色の唇から目を離せない。

「やってやったぞ。次は……」

シルヴィアは安心してた俺に足払いをかけてそのまま地面へと押

し倒す。その衝撃で俺は正気に戻って現状を把握した。

これは所謂「お前がパパになるんだよ!」というやつでは?

「シ、シルヴィアさん! これは流石に拙いって!」

「ここまで来て止められるか!」

彼女は俺のズボンに手をかけて下ろそうとする。俺はそれを下ろされないように引つ張り上げるといふ何とも訳の分からない構図が出来上がった。

「やめろ!ズボンが破ける!」

「ならさつさとその手を放せ!」

「分かった!特大牛カツ奢るから一旦落ち着こう」

「……………駄目に決まってるだろ!」

「こいつ今ちよつと悩んでたぞ。」

「やーめーろー!」

「はーなーせー!」

「あのおう…………」

おや?今第三者の声が聞こえたような。

気のせいではなかった。そこにいたのは城で見かけた女性兵士だが、名前は知らない。気まずそうな表情でこちらを伺っていた。

「お取込み中だったようなので話しかけづらかったんですけどお、こちらもちよつと緊急の案件だったのでえ、思い切って声をかけることにしましたあ」

見ようによつては情事と思われても仕方ない状況で声をかけるってどんだけ肝が太いんだ。

シルヴィアが物凄い表情で兵士を睨んでいる。兵士は兵士でビクビク怯えながら話を続け出した。

「東方の国ジパングの使節団の巫女様が交渉の場に勇者の同席を求めています。何でも魔王を倒した者がどういふ人物か見極めたいとかあ」

とりあえず執行猶予が出来たと思えば易いものである。

## 異文化交流には発見がいつぱい

城に行くとはランダムだとあるイベントが発生してしまう。

そのイベントとは――

「ハールちゃん、ひーきーしーぶーりー！」

俺をこの世界に召喚した国王。その一人娘であるシャーロット王女殿下のタツクルである。シャーロット王女はスレンダーで女性らしい膨らみは少々欠けるが背が高く、まるでファッションモデルのような美少女だ。普通ならそんな美少女に抱きつかれるのは男としては本望。

それはその破壊力が戦車級チャリオットでなければの話だが。

彼女にとつては軽いスキンシップかもしれないが、軽いスキンシップで重症を負うのとなると、こちらとしても必至の覚悟で当たらなければいけない。昔はアイザックと二人がかりで止めていたが、今では一人でもなんとか止められるようになった。

あくまでなんとか止められるようになっただけでキツイ事には変わらない。しかしよくもまあ、あんな動きそうなドレス姿で爆走出来るものだ。とりあえず彼女には加減というものを覚えて欲しい。ちなみに追跡ホーミングしてくるので避けるという選択肢は存在しない。

「うぐお……！」

相変わらず当たりが強い。身長が俺とさして変わらないこともあってその威力はより強力なものとなる。決して俺が小柄だというわけではない。

「お、お久しぶりです王女殿下」

「んもー、シャーリーで良いって何度も言ってるのに！」

「いや、そういう問題では」

「じゃあ王女命令ね、敬語禁止」

「はあ……お前も変わらないな……」

奇妙なくらいにフレンドリーな王女様に思わず溜息が出る。

「シルちゃんもお久ーってどうしたの？ 何かむくれてるけど」

「別に……」

シルヴィアはいかにも何かありましたと言わんばかりなくらいわざとらしく不機嫌だ。さつきからあまり喋らないのも不機嫌さを強調するのに一役買っている。

「何、痴話喧嘩？」

一概に違うとも言えないので何とも言えない。恋愛に興味無さそうなシャーリーであつてもなんとなく察しがついてしまったようだ。あまり深く突っ込まれたくないので話を本題に移すことにした。

「ところでジパングの使者はいつ頃来るんだ？」

「もう来て席についてるわよ。いやー海の向こうの人達に会うのは初めてだから緊張するわー。ハルちゃんも会ったら驚くと思うわよ」

はて、驚くとはどういう事だろうか？

シャーリーに案内された先に待っていたのは黒髪黒目の男女達。男性の方は日本でも大昔に見られたみづらのような髪型をして簡素ではあるが気品ある佇まいをしている。女性の方は髪型に多少差異はあれど皆、紅白の巫女衣装に身を包んでいる。

この世界に来て黒髪黒目の見たのは初めてだ。

その中でも特に目を引いたのが小学生くらいの背丈の少女。俺が場に足を踏み入れると真っ先に俺を視たのがその少女だった。その瞬間にこの少女は只者ではないとこの二年間で培った俺の本当が知らせてくれる。シャーリーの言った事はこういう意味だったのか。シルヴィアも気づいたのか、流石に不機嫌そうな顔を止めて真顔に戻ってくれた。

「成程、貴方が魔王を倒したこの国の勇者でしたか。強く優しい気に満ち溢れてますね」

その幼い見た目とは裏腹に落ち着いた声色で微笑みかけてくれて何ともアンバランス。もしかしたら見た目通りの年齢ではないかもしれない。しかし褒められて悪い気はしない。

「紹介が遅れました。私は神楽と申しま……」

彼女は紹介を言いかけて顔をしかめた。その目線の先にはシルヴィアがいる」

「何故、勇者が妖魔を連れて……？」

俺は耳を疑った。

「国王。私は勇者の同席は求めましたが妖魔の同席を求めた覚えはありませんが……」

他のジパングの使者達もシルヴィアを冷ややかな目で見ている。まるでここはお前が来るような場所ではないと言っているようだ。

「え、いや……その……」

「ちよつと！ シルは勇者の仲間よ！」

国王も何と言いつ返したら良いか迷ってるのか言葉を濁している。反対にシャーリーはシルヴィアを魔物扱いしたことに腹を立てて言い返した。

「そうでしたか、勇者一行に妖魔の仲間が。品格が問われますね」

「何ですって!？」

「よせ」

神楽とやらに食ってかかろうとしたシャーリーをシルヴィアが制する。

「でもー」

「気にするな。差別させるのには慣れっこだ」

慣れているからといって平気なわけじゃないだろうに。

俺はシャーリーが怒りを露わにしているのを見たお陰か思っていた以上に冷静になる事が出来た。俺はまだ20年も生きていない若造だが、自分の感情に任せて外交問題を起こす程子どもものつもりはない。

しかし、大切な人をバカにされて黙っていられるほど薄情になるつもりもない。

「国王陛下、王女殿下。どうやら俺達はこの場には相応しくない人物だったようで、大変申し訳ありません。すぐに退出させていただきます。後日、また改めて謝罪をさせていただきます」

「え？ ちよ、ちよつと!？」

「あ、ああ……」

俺は頭を深々と下げた後、シルヴィアの手を引いて早歩きでこの場を後にした。後ろでゴチャゴチャやってたが、もうどうでもいい。俺

は一刻も早くこの場から離れたかった。



「お、おいハル！ 何処まで行くつもりだ!?!」  
「え?」

シルヴィアの声で我に返る。気がつけば、とっくに王都から出ていたようだ。それまでずっと彼女の手を引っ張ってたのか。

「わ、悪い。痛くなかったか?」

「いや、大丈夫だ」

頬が紅潮してるのは歩き疲れたからか、それとも別の理由があるのか。

「ハルは、私のために怒ってくれたんだな」

「シャーリーのお陰でいくらか冷静になれたけどな」

「はは、私には爆発する前に離れたように見えたけどな」

「手厳しいなあ」

苦笑いしながら見上げた空はもう夕焼けが綺麗だった。その後はジパングの使者達は黒髪黒目で俺と似てただの、国王は相変わらずおどおどしてただのシャーリーはあんなんで嫁の貰い手がいるのかだのとたわいのない雑談に花を咲かせていた。

しかし、今日あった出来事が無くなるわけではない。俺も答えを出さなければ勇気をだした。シルヴィアに失礼だ。

そう思い始めた時、チリンと小気味良い鈴の音色が聞こえた。そこにいたのは先程の巫女、神楽であった。奇妙なことに付き人はおらず一人だ。巫女といえば鈴だなどか考えながらシルヴィアを後ろに下がらせる。

「あまり王都から離れていたくて助かりました」

「そうですか、それはどうも。それで何故態々追いかけていらしたのですか?」

「先程の件は私に非がありましたので謝罪を、それと聞きたいことが」  
「聞きたいこと?」

「貴方は何故妖……いえ、こちらの大陸ではだーくえるふと呼称されてるのでしたか。何故共に在ろうと思えるのですか？」

今回は先程のような侮蔑ではなく純粹に分からないから聞いていうのだろうか。ならこちらもはっきり答えるでしょう。

「確かに、俺とシルヴィアは種族は違います。それにダークエルフは魔族に分類されることもある」

「ならば何故？」

「理解し合えたからです。一緒に話し合って、一緒に飯を食って、一緒に遊んで、一緒に笑って、そうやって理解し合えたんです。だから……」

俺は真つすぐな目で神楽を見た。

「俺の大切な人を化け物扱いするのは止めてくれ。シルヴィアはお前らを害するような事はしてないしこれからする気もないんだ」

「そうでしたか……その子をよっぽど愛してるんどすなあ」

「え!？」

言われた事にも驚いたが、何よりも突然喋り方が京都弁っぽくなつたインパクトの方が強い。それに先程までの落ち着いた態度にいたずらっ子のような無邪気さが加わっている。

「かんにんなくこつちが素なんどす。そやさかいそつちも敬語はええどすえ」

「か、変わった喋り方だな」

「そうどすか？」

シルヴィアはさつきまでの態度が一変したのと、京都弁に全く馴染みがないせいで俺よりも困惑していた。

「ええものも見る事出来たし、今回の外交に収穫はあつたなあ」

「はあ……」

「お詫びいうのも何どすが、占いでもしまひよか？」

「占いっ？」

そういえばラットの情報によると使節団の巫女の中に過去、現在、未来を見通す巫女がいるという話が合った。それについて聞いてみるか。



「うちどすえ」

「なあ、使節団の巫女の中に……はっ？」

「せやから、うちが過去、現在、未来を見通す巫女どすえ」

神楽は俺が質問する前に先んじて答えた。国王やシャリーから聞いた可能性も0とは言い切れないが、二人は俺が使節団の中に例の巫女がいるという情報を持っている事を知らない。ラットだってこの情報は未確定と言っていたのだ。

「なんかうちに占うて欲しい事でもあるんどすか？」

「……俺が元の世界に帰る方法を知りたい。詳しい詮索は無しで頼む」

それを聞いたシルヴィアが緊張のゴクリと喉を鳴らす。彼女だつてここまでくればこうなることくらい想定していただろう。

「ちよい待つとつてくださいな……」

そう言った彼女は数秒眼を瞑る。次に眼を開けた瞬間、彼女の眼は淡く輝いてなんとも神秘的な光を放っているではないか。まるで自分の身体に神でも降ろしたかのようだ。

そして告げられた。

結婚式は幸せがいっぱい

『魔王城に行ってみるとええどすえ。せやけど気い付けとおくれやすね。うちん眼がなんかに阻まれてそれ以上詳しくゆうは分からへんかったんどす』

拠点に戻った俺は巫女、神楽から伝えられた元の世界に戻るための手がかりの言葉を思い返す。そういえば魔王を倒した後に魔王城には行つてなかったし、魔王を倒したすぐ後は秘薬で回復してそのまま帰ってしまったから碌な探索はしていなかった。

引っかかるのは神楽の眼をレジストした正体不明<sup>アンノウン</sup>。神楽も自分の眼が阻まれた事には驚いていた。仮に、それ程の存在が魔王城にいたとして、何故魔王との勝負で参戦してこなかったのか？ 何故、魔王と戦った直後のボロボロだった自分達を襲つてこなかったのか？ 気になる事は尽きない。

行くとしてもそれ相応の準備が必要だろう。

「ハル、手がかりが見つかってよかったな」

「ああ、そうだな」

ソファに座っていた俺の隣にシルヴィアが座り、俺に話しかけてくる。心なしか元気が無さそうにも見えた。

「えつと……今日の夕飯は何にしようか」

「帰りに牛カツ食いに行つただろ。まだ食べるのか？」

「そ、そういえばそうだったな」

シルヴィアの乾いた笑いが無駄に広い拠点に力なく響く。

「なあ、ハル。元の世界に帰れたら、やっぱり帰ってしまうのか？」

「そりやあな。元々そのために色々周つてたわけだし」

以前にもこんなやり取りをしていた気がする。違いがあるとすれば、今回はこれだという当てがあることくらいだろうか。

「嫌だあ……」

「え？」

「帰つちや嫌だあ……」

シルヴィアは俺の裾を掴みながら泣いていた。俺を犯そうとして

いたあの時の強気は一体どこへ行ってしまったんだ。

しかし、こんな風に泣きじやくる彼女を見たのは久しぶりだ。

「お前がこんな風に泣くのはあの時以来か」

「あの時？」

「お前が心を開いてくれたあの日だよ」

俺はそう言って彼女の綺麗になった銀色の髪を撫で始める。昔はボサボサで荒れ放題だったのに本当に綺麗になったものだ。

「シルヴィア……この名前をハルに貰った時か」

心を開いてくれたあの日、彼女は自分の名前を忘れてしまったと言っていた。それを不憫の思った俺が名前を付けてあげた。髪の毛が銀色だからシルバーをもじってシルヴィア、今思えば何の捻りも無い名前だった。俺にもっと語彙力があつたらもっといい名前を付けられたんだろうか。

今思えば、答えは決まっていたのかもしれない。それを下らない意地で覆い隠していただけだった。

「シルヴィア。俺、ちよつと欲張りになつてみようと思う」

「欲張り？ 食後のデザートを増やすのか？」

「違うからね。もっと真面目な話だからね」

何故ここに来てこの子は胃袋で会話をしだすんだろうか。

しかし、実際何て言えばいいんだろう？ 女子に告白なんてしたことないぞ。シルヴィアが散々愛の告白をただけにただ『好きだ』とか『愛してる』だけじゃ足りない。それに吊り合う言葉を捧げたい。「俺な、初めてお前を見た時、すごく可哀想だつて思ったよ」

全身傷だらけで、鎖で繋がれてて、ボロ切れを纏つてて、全てを諦めた目をしていた。あの目をしたシルヴィアは今でも忘れられない。「だからそんな風に泣いたり笑ったり出来るお前を見る事が出来て良かった。あの日まで生きていてくれてありがとう」

「いや、感謝するのは私の方で……」

「これからもお前の泣いたり笑ったりする顔を見たいと思う。元の世界に帰った後もだ」

「？」

シルヴィアは俺の告白に目をぱちくりさせていた。ちよつと分かりづらかっただろうか。どんどんこそばゆい気分になっている。愛の告発ってこんな気分になるのか。

「ううっ、だから……そのな……あーもうっ！」

散々迷ったが、取り繕うのは止めた。結局はリビドーか、と頭の片隅で苦悩しつつシルヴィアを力一杯抱きしめた。シルヴィアは困惑してなすがままだ。

「あーもうヤバい！ 大好きだよ！」

「ハル？」

「嫌って言っても俺の世界に連れて行くからな！ 両親と姉ちゃんにだって紹介するからな！ 結婚式は向こうで挙げるからな！ 覚悟しとけよ！」

言った。

言ってしまった。

全部吐き出してしまった。

「ハル、これは夢か？ 夢なら覚めないで欲しいな」

「夢であつてたまるか。こんなこつぱずかしい事何度も言えねえよ」

「そうか……そうかあ……」

シルヴィアは安心すると俺の背にガツチリと手を回す。互いが互いを手放したくないと言わんばかりの構図が出来上がった。もつと早くこうすればいいと気付くべきだった。

もつと彼女を見ていたい。もつと彼女の事を知りたい。塞き止めていたものが溢れていく。この時ばかりはクソ仕様の召喚魔法とそれを実施した国王に感謝した。

そこから先の事、愛し合う男女が二人つきりでいればどういった行為に及ぶのかは言うまでもない事かもしれない。

唇を貪り合つたのを皮切りにお互い止まれなかった。止まろうとする気も起きなかった。触れ合えば触れ合う程欲しくなっていく。よく今まで我慢してこれたものだと思議にすら思えてきた。

無我夢中で互いを求め合い、気が付いたら朝になっていた。互いに汗やら何やらでベトベトであることに気づきいて笑い、二人は泥のよ

うな眠りにつくのだった。  
きつと何があつても今日という日を忘れることは無いだろう。



結婚、それは人生の墓場とは一体誰が言い出した言葉だったか。だ  
というのに何故人は結婚をするのだろうか。

疑問は尽きないが、まずは――

「おめでとう」

「おめでとう」

「めでたいなあ」

「おめでとー」

仲間達の結婚を祝おうか。

アイザックとホリイの結婚式は二人の話し合いの末にホリイが  
育った修道院で行われることとなった。あのオンボロ修道院が立派  
に生まれ変わったお披露目も兼ねているそうだ。

アイザックは慣れない礼服を着て動き難そうに変な顔をしている。

ホリイは白いウエディングドレスに身を包んで幸せそうだ。

シャーリーも式典に参加したがってたのだが、二人が小規模でやり  
たかったのと、シャーリーが物の弾みで何かを壊さないかという心配  
から国王達に止められたのだった。

結婚式お馴染みの神父により誓いの言葉やブーケトスも終わり、今  
は立食パーティーみたいないな形式になっている。

「よう、ハル」

「うん？ 今日の主役がどうしたよ」

アイザックは親類達や修道院関係者を振り切ってこちらまでやつ  
てきた。

「お前に感謝の言葉を言いたくてな。お前があの日、腕相撲で酒代を  
稼いでた俺を見つけてくれなかったら今の俺は無いし、あんなに可愛  
い嫁さんも貰えなかった」

「自慢か？」

「それもある」

「……」まで隠さないと返って清々しい。

「そうだ。俺もお前に言いたいことがあったんだ。後でホリイさんにも言うけど」

「何だ？」

「俺、シルヴィアと結婚を前提に付き合う事にした」

「……は？」

「どうやら驚き過ぎてまともに声も出ないようだ。」

「まあ、ビックリしたかもしれないけど……」

「お前達、付き合ってたなかったのか？」

「……はい？」

「ちょっと待って、どういう事？」

「え、いや……お前らはよく二人で一緒に遊びに行くことが多かったし、仲良かったしでてつきり付き合ってたもんかと。休日もお前らを二人にしてあげようってホリイが提案してたからさり気なく……」

「え、俺とシルヴィアって傍から見たらそういう風に見えてたの？」

微妙な空気になってしまい、互いに苦笑し始める。まさか驚かしてやろうと思ったのに逆に驚かされることになるとは思わなかった。

ちなみに当のシルヴィアは山盛りの料理にありついて、それを見てホリイが苦笑いしている。新郎新婦が二人して苦笑いしてる結婚って何だよ。

「そうだ。娼館に行こうとして目の前で怖気づいた事は黙っというてるよ」

「本当だな!! ホリイにバレたら俺死ぬからな！」

それは罪悪感でかな。それとも物理的にかな。

「男二人して何を話しているのですか？」

「ハル、これ食べてみるか？ 美味しいぞ」

女性二人も合流して勇者一行が揃った。俺はシルヴィアが差し出した何かのテリーヌっぽい料理を頂く。中々に美味しいな、これはエビのすり身を使っているようだ。

「あ、ソースが口について……ああっドレスに落ちるっ！」

ドレスに落ちそうになったソースは間一髪のところであのハンカチに受け止められた。

「あの、勇者様。本当にありがとうございました。貴方のお陰で修道院を建て直す事が出来ましたし、アイザックさんと出会うことも出来ました。何てお礼を言えればいいか……」

「いやいや俺は何もしてないって。二人とも幸せになっただけだよ」

俺もいつかシルヴィアと結婚式を挙げるのだろうか。シルヴィアの浅黒い肌に純白のウェディングドレスは映えそうだな。いや、白無垢もアリといえればアリかもしれない。

そんな妄想をしながら俺は雲一つない青空を見上げるのだった。

## デートには懐かしいがいつぱい

実際に元の世界に帰るにしてもどういふものなのか。

魔王城に世界を越える装置でも存在するのか。それとも召喚の逆である送還魔法について記載されている魔導書でも存在しているのか。

後者の類なら自分の好きなタイミングで帰る事が出来る可能性が高い。しかし前者の類だと魔王城に行つて即帰還となる可能性が高い。RPGでいうここから先はセーブ出来ないぞというやつだ。この世界でやり残したことがあつたら先にやつておこう。

それでシルヴィアにも何か心残りがあつたら気軽に言つてくれと  
いつた結果、

『デート……デートがしたいな』

という要望を貰い、デートする事となつた。シルヴィアとはデートとか色んなものをすつ飛ばして関係を持ってしまった気がするが、今更気にしても仕方ない。

ということで俺達二人はデートをしているのだが。

「美味しいなこれ」

「ああ、そうだな……」

シルヴィアは現在、左手に豚肉の串焼き、右手に焼きトウモロコシと食に夢中。さつきから俺達は食べ歩きしかしていなかったりする。元の世界なら遊園地、水族館、映画館、デパート、ゲームセンターと行く当てはいくらでも思いつくのに、この世界にはそういった無難なデートスポットが無いのは辛い。せめて祭りでもやつていれば良かったのだがそんな事も無い。おまけに食べ歩きなら休日によくしているから普段と何も変わらない。せめて手を繋ぐとか腕を組むとかしたいのに、両手が塞がってたらそれも叶わない。

ああ、もやもやする。焼きトウモロコシに醤油が塗ってないものあつて余計もやもやする。この世界に醤油が無いから仕方ないのかもしれないけど、やっぱり焼きトウモロコシに醤油は欠かしちゃいけないよ。



「勇者様！ 腸詰焼き安くしとくよ！」

「ホタテ貝焼き立てですよー！」

「スープもどうだい！ 具沢山にしとくよ！」

商魂たくましい屋台のおじちゃんやおばちゃん達は、顔馴染みの俺達を見るなり声を張ってくる。見せてくる料理はどれも美味そうだ。やはりこの臨場感は屋台でしか味わえない。

「おおっ、どれも美味そうだな」

「あはは、そうだな」

こんなことならアイザックかホリイにでもおススメのデザートスポットを聞いておくんだった。そう思いながらも結局全部買っていく俺であった。

両手のものを片付けたシルヴィアはふとこんなことを言い出した。

「やつぱり、ハルの世界はこことは違うのか？」

「そら違うよ。魔法もデミヒューマン亜人も魔物も無いけど文化はかなり発達してる」

移動魔法が無ければ移動手段が馬車や帆船だし。胡椒のような香料、砂糖、塩といった元の世界では安価で購入出来るものがこっちは高価値で中々手が出せなかったりと改めて先人の知恵のありがたみを知る事が出来た。

「それに食器やら鍋やらに鉛が使われているのには驚いたなあ」

「そんなにおかしなことなのか？」

「おかしいというか危険だな。病気になったり、精神に異常をきたしたりする」

聞くところによると、若くして亡くなったシャーリーの母、つまり女王陛下は頭痛や手足の痺れに悩まされて最後には寝たきりになってそのまま息を引き取ったという。これはいかんと思った俺は、国王には神託を受けたとか何とか適当な事を言っつて鉛を使った食器や調理器具の生産を止めさせて、その代わりにガラスの食器や鉄の調理器具の生産が増えるようになった。

本当に驚くべきはたった一年でここまでの数のガラス製品、鉄製品を安定して作り上げている職人の方々なのかもしれない。元の世界

じや機械による大量生産万歳だし。

「あれ？」

ふと周辺を見回して気が付いたが、いつの間にかシルヴィアの姿が見えなくなっていた。何か興味を惹かれるものでも見つけたんだろうかと目を凝らして周囲を見渡してみた。すると、少し先に屈んでいる彼女がいた。そして隣の泣いている子どもを見て何となく事情は察した俺は、彼女たちの前まで歩みを進める。

「シルヴィア、急にいなくなるなよ」

「ハル、この子は……」

「迷子か？」

「母親とはぐれてしまったらしい」

さて、どうしたものか。ベソかいている子供の相手なんてしたことないし。

「えーっと、僕？ お名前は何ていうのかな？」

「……ラティア」

「おおつ、格好いい名前だね。男の子ならあんまりベソかいちゃ……」  
「ラティア、女の子だもん」

余計に泣かれてしまった。

どうやら俺は子守の第一歩を盛大に踏み外してしまったらしい。でも髪は短めだし、ズボン履いてボーイツシユな格好だから仕方ないよね。

「おい、どうするんだこれ」

「さて、どうしようか……」

格好つけて言ってみても内心は汗だらだらだ。このままだと俺が泣かせたみたいな事になるかもしれん。かといって放置して逃げるのも後味が悪い。

ちよつと下手だけど、あれをやってみるか。

「〜〜」

そう、歌である。歌は万国共通、子どもであっても変に難しい歌でなければ聞き入る事だろう。それにチョイスは俺が子どもの頃によく視ていた某国民的アニメとくれば例え異世界であってもある程度

興味を引くだろう。

というか現状思いつく中での最終手段なのでこれでどうにかなら  
ないと困る。

♪~~~~~.....ふう」

とりあえず一曲歌い終わった。

「.....」

とりあえず泣き止んではいる。しかしこつちをめっちゃ見ていた。  
ラティアちゃんだけでなくシルヴィアや通行人の何人かもだ。

「他には？」

「え？」

「もーいつかい、もーいつかい」

「ええ.....」

思っていた以上に好評だった。後で知ったことだが、J—POPの  
ような曲調の音楽はこつちの世界では珍しかったらしい。

「歌うのはいいけど、君のお母さんを探しながらだぞ」

「はーい！」

「シルヴィア、この子を肩車してやってくれ。俺がやると色々問題が  
発生する」

そう、事案という問題がな。勿論そつちの趣味は無いが、世間体の  
ため。そしてラティアちゃんの尊厳のためには必要な事だ。

「.....？ 分かった。この子を肩車すればいいんだな」

「わー！」

肩車して貰ったラティアちゃんはいつもより視点が高くなって楽  
しそうだ。首を傾げていたシルヴィアだったが、笑顔の少女を見て彼  
女も微笑んでいる。

変わった曲調の歌を歌っている男と少女を肩車しているダークエ  
ルフは周囲から見ると目立っていることもあって少女の母親はすぐ  
に見つかった。

「本当にありがとうございます」

「いえいえ大したことはしてないですよ」

「よかったですらどうぞ。うちの果樹園で採れたリンゴです」

「いやいや本当にいいですって!」

殆ど押し切られるように袋一杯のリンゴを受け取ってしまった。袋からのぞかせるそれは紅く瑞々しそうでなんとも美味そうだ。

「お兄ちゃん、お姉ちゃんありがとー!」

「元気でなー!」

俺達に手を振りながら母親に連れられていくラティアちゃんを見て俺にもあんな時期があったのだと懐かしい気分になった。

「母親か……」

「シルヴィア?」

「羨ましいな」

そう言った彼女の笑顔はとても痛々しかった。

「私はもう両親の顔もよく覚えていない。会えば思い出すかもしれないけど、今更会ってなんてくれないだろうし……」

そんな辛そうな顔をして欲しくない。俺はそう思いながら彼女の優しく握る。だって、辛い思いをした先に楽しい事や嬉しい事が無かったら悲しいだけだから

「ハル……」

シルヴィアの潤んだ目にまるで引き寄せられるように――

「うわあ、往來でイチャイチャしてる……」

「あーあー、なんでか知らへんけどここだけ暑おして敵わへんなあ」  
「?!」

何かいた。

「神楽さんにシャーリー!? 何でここに……」

「うちは観光どすえ」

「で、私はその案内役って事。凄いでしょ」

そう言っただけでシャーリーは薄い胸を張った。

「どうしたんだよ急に。シルヴィアの事を妖魔って言われたことにキレてただろ?」

「それに関しては向こうセンリョだったって謝ってきたわよ。ところでセンリョって何?」

お前の親父みたいな人の事を言うんじゃないかな。

勿論口には出さないでおく。

「ええなあ、羨ましいいわあ。うちの旦那は最近淡泊やし、うちもまた昔みたく燃えるように愛されたいわあ」

「さいですか……旦那？」

「だ、旦那って、もしかして結婚してるの!?!」

「してますで。こないな見た目だけどうちは今年で39です。流石に39で結婚してへんかったら売れ残り確定どすなあ」

おかしそうにクツクツと笑う神楽さん。

だが、ちよつと待つて欲しい。年齢なんて関係ない。見た目若くて美人ならそれはそれでアリなのでは？

「二人を見てるとあの人に求婚されたあの日を思い出すわあ。初夜まで手え出してこーひんかったけど」

「何？ ハルは告白したその日に押し倒してきたぞ？」  
やめろ。

俺の初体験をバラすんじゃない。

「お盛んどすなあ」

「わー！ わー！」

唯一そつち方面に免疫が無いシャーリーは混乱していた。一応こんなんでも大切に育てられてる王女様だというのが分かる数少ない一面だったりする。

そんなこんなで俺とシルヴィアの初デートは終わるのだった。たまにはこんな風に古風ベタなものいいんじゃないかな。



準備が出来た。

とうとう魔王城へ向かって出発する。

「なあ、やっぱり俺達だけでも……」

「何言ってるんだ。俺達は仲間だろ」

アイザックが強めに肩を叩いてくる。

そう、アイザックとホリイがついてくると言っているのだ。勇者

パーティーが復活するのは嬉しいが、二人も忙しいだろうし、ホリイにいたってはお腹が目立ってきた以上戦闘なんてさせられない。

「ホリイの移動魔法で送って貰うだけでも……」

「これで最後かもしれない。ですからお見送りをさせて欲しいんです」

「ああ、友達を見送りたい。それは迷惑か？」

二人は笑顔でも、その意志は固かった。

迷惑な筈なんてない。そんな事思っているわけがない。

「ハル、仲間っていいものだな」

「そうだな」

シルヴィアの言葉にちよつと泣きそうになった。

何度も死にかけてたが、よく皆ここまで生きていてくれた。これで本当に最後になる事を祈る。

「では行きます」

彼女が一度でも立ち寄った場所であれば何処にでも一瞬で到着する事が出来る移動魔法。それにより一瞬で魔王城に行く事が出来た。

あんなに魔物がいた魔王城も魔王亡き今はその影もない。

「シルヴィア、どうだ？」

「周辺に魔物の気配は感じられないな。音も聞こえない」

「用心しておくか。アイザック、後ろは任せたぞ」

「任せときな！」

そうして魔王城の探索が始まった。

しかし、書斎、会議室、食堂等と結局魔物と遭遇せずに調べる事が出来たために拍子抜けしてしまった。

残ったのは魔王がいた玉座の間のみ。

「おいおい収獲無しは勘弁だぜ」

そう言いながら玉座の間への扉を開けようとした瞬間にシルヴィアに手を掴まれた。

「どうしたんだ？」

「気をつける。玉座の間に何かいる。かなり強いぞ」

気が付いていなかった俺達3名はその言葉に息をのむ。

「……とりあえず構えておくか。ホリイは下がって、アイザックは俺と前へ、シルヴィアは弓矢で援護を頼む」

「は、はい」

「準備は出来てる。いつでもいいぜ」

「いこう」

扉を開けてすぐさま剣を構えた。

「ひいひいひい勇者きたあああああー！」

角が生えて真っ青な表情で怯えている少女が現れた。

## 最終話 さようならにはありがとうがいつぱい

「いいいいいやああああああ、お願いします殺さないでください  
いいいいいい！ 別に人間に危害を加えるつもりは小指の爪の先程も  
無いんです！ ちよつと農業したり植物の品種改良をしたりして自  
給自足のスローライフを送りたいだけなんです！ お願いだからあ  
！ 何でもするからああああああ！」

よつぽど俺達の事が恐ろしいのか、半狂乱で叫んでいる俺とさほど  
歳の変わらなそうな少女に戦う気満々だった俺達は返って吃驚した。

「ちよ、ちよつと落ち着いて……」

「お願いしますううううう！ まだ死にたくないんですううううう  
！」

神話生物を見て発狂した人ってこんな感じなんだろうか。少なく  
とも向こうに敵意は無いので話し合いに持っていきたいのだが、これ  
では彼女が落ち着くまでに一体どれだけかかる事やら。

難しい顔をしていたらシルヴィアは無表情で少女の後ろへ瞬時に  
回り込み――

「ピーピー騒ぐな」

「ピツ!?!」

首にナイフを当てて恐ろしくドスの効いた声で脅し始めた。少女  
の叫び声こそ止んだがその代わりに冷や汗が大量に出始める。

その蛮族染みた行為に若干引いている俺がいる。

「お前は一体誰だ？ ここを何をしていた？ 知っていることは全て  
吐け、さもなくば殺す」

「はなっ、話しますウ……」

少女は真つ青な表情で精一杯勇気を振り絞った様な声色で何とか  
声を出して――失禁してしまった。

その後、少女の着替えや掃除、お茶の準備等で話し合い開始は大体  
20分後に始まるのだった。

「ハル、頑張ったぞ」

「ああ、うん。頑張ったね」



実際、話が進んだのはシルヴィアのお陰なので頭を撫でてあげる。シルヴィアは基本敵には幾らでも冷酷になれるが、こういう時にはご褒美をねだる子犬のようだ。

「あの……粗茶ですが……」

「ああ、どうも……」

少女がおずおずと差し出したお茶を受け取る。敵意は無さそうだが念には念をと口にはしないでおく。

「おお、このお茶美味しいな」

そんな事を思った先からアイザックが無警戒にお茶を口にしてしまった。

「あの、アイザックさん。体調が悪くなったら直ぐに言ってくださいね?」

「ん? 俺はすこぶる健康だぞ?」

仮に毒が盛られたりしてもホリイなら解毒出来るから大丈夫だろう。

「あの、先程はとんだ粗相を……」

「いいから早くしろ」

「ひゃい! 私にはフィーネと言いましゅ!」

じれったくなつたのだろうか、それとももっと褒めて欲しいからか目の前の少女、フィーネを睨みつける。

「えっと、フィーネさんは魔物、というか魔族でいいのかな?」

「はい、もしかしたら予想はついてるかと思いますが、魔王の一人娘です」

彼女の言う通り、そういう可能性もあると考えていたが、実際に目の前にするとやはりというか驚いてしまう。

「魔王の娘といっても母が人間なので混血ですが」

「俺達を恨んだりとかは……」

「ああ、そういうのは無いです。私も父の事はそんなに好きじゃ無かったのです。何でも捕らえられた母に気まぐれで産ませたと聞きましましたし……」

「フィーネさんのお母さんは……?」

「亡くなりました。私の出産に耐えられなかったようで……遺体も魔物の餌になったそうです」

酷い話もあったものだ。子は親を選べないと言うが、それにしても酷過ぎるのではないだろうか。

「だから魔王を倒してくれて、本当に感謝しています。母の敵を討つてくれてありがとうございます」

彼女は深く頭を下げた。とても強い礼だった。それだけ彼女は魔王が憎かったのだろう。それと同時に臆病な彼女は魔王に怯えていたのだろう。

俺は目の前の少女を救う事が出来たのだと、そう実感する。

「むう……」

何故かシルヴィアがムスツとした顔で服を引っ張ってきた。

「ええっと、お腹すいた？」

「……何でもない」

もしかして嫉妬していたんだろうか。だとしたらすごく可愛いし、いじらしい。心配しなくても今更別の人に鞍替えする気はないという意味合いを込めてシルヴィアの手を握る。

「あっ……」

シルヴィアは少し驚くいたが、頬を染めながら手を握り返してくれた。

「それでなんですが……」

「えっ、何？」

「いえ、魔王城にどういったご用事で来られたのかという話だったのですが……」

しまった。聞いてなかった。

「いやね、元の世界に帰る方法を探している最中、とある千里眼持っている知り合いに魔王城についてみると良いって言われてね」

「千里眼？もしかしてあの見られてるような感覚って……。突然の事だったのでつい弾いてしまいましたけど」

どうやら魔王の娘なだけあってかなりの実力者なのかもしれない。彼女が話が通じる人格者で本当に良かった。話し合いで事が済めば

それに越したことは無いしね。

「それで元の世界に帰る手段ですか……」

「何か心当たりとかは——」

「ありますよ」

フィーネさんが人差し指をクイツと曲げると本が一冊彼女の手元まで飛んできた。

「勇者が手を付けられない程に強くなった場合を考えて勇者を強制的に別の世界に飛ばす魔法を研究していたみたいなんです。結局のところ完成には至りませんでした。既存の召喚魔法と組み合わせれば送還魔法の術式に出来ると思われます」

今までの苦労は何だったんだと言わんばかりにトントン拍子に事が運んでいく。きつとフィーネさんが凄過ぎるだけなのだろう。

「ただ、私には勇者様のいた世界が分からないので世界を繋げるためには勇者様に強くイメージして貰うしか無いんですが、そこは大丈夫ですか？」

「その辺は頑張る」



俺とシルヴィアは荷物を持ってフィーネさんが描いた複雑怪奇な魔方陣の上に立っている。理論を組み上げるのに一時間くらいを要したが、それは別に構わなかった。

元の世界へ帰る事が出来る。それだけが重要なことから。

ちなみに荷物はあまり大きいものは持っていけないとのことなので互いにカバン一つずつ程度の量になってしまった。

「もう、帰っちゃうんだな……」

「うん」

無理矢理召喚されて、魔王を倒してくれだなんて無理難題を押し付けられて、頑張つて仲間を集めて、死にかけながらも魔王を倒して全員生還を果たした。

辛い事は多かったけど、沢山の知り合いと、背中を任せられる仲間

と、心から愛する人に出会えた世界。いざ帰るとなると名残惜しさを感ずる。それだけ濃密な二年間と半年だった。

「なあ、別に今すぐじゃなくても——」

「時が経ち過ぎればイメージもそれだけあやふやになっていきます。それだけ成功率も下がってしまうんです」

アイザックの言葉をフィーネさんが否定する。確かに、完全記憶能力なんて都合のいいものを持っていない俺では時間がたてば記憶は薄れていく。この世界に二年以上留まっていた事もあって、記憶に自信のない部分も幾らかあった。

「二人とも、準備はよろしいですか？」

俺はコクリと頷いた。その隣ではシルヴィアが俺の手を強く握っている。

「シルヴィアさん、最後の確認です。もしかしたらもうこの世界には

——」

「煩い、さっさとしろ」

「アツハイ」

フィーネさんが魔族の言語で呪文を唱え始める。俺はイメージする。自分の家を、自分の通っていた高校を、帰り道によく通る商店街を、子どもの頃からよく行っている公園を、そして家族の顔を。

しばらくすると、魔方阵から間欠泉の如く光が溢れてくる

「イメージを絶やささないで」

驚いて一瞬考えるのを止めてしまったが、フィーネさんの言葉で思考が戻る。

「よしっ、世界が繋がりました！ 後はそのまま身を任せてください。

手は離さないでいてください」

離さない。離してたまるか。

ああ、これでこの世界ともお別れかと思うと感慨深いものがある。

「アイザック！ ホリイ！ こんな俺についてきてくれてありがとう  
！」

目じりに涙をためながら精一杯の感謝を述べた。

この二人には感謝してもしきれないくらいだ。勇者として召喚さ

れただけの一般人に良くここまでついてきてくれた。

「ぐつ、二人とも！ 向こうでも元気でやれよ！」

「シルヴィアさん！ 向こうでもハルさんと仲睦まじくいてください  
ね！」

「ああ！ ハルの子どもをいっぱい産むぞ！」

皆、涙を流しながら別れの言葉を叫ぶ。この世界に残る事が出来る  
一瞬一瞬がとても愛おしい。今更もつと何かしておけばよかった等  
と後悔まで生まれてくる始末だ。

そして全てが光に包まれた。



「あーあ、見えへんようになってもうた」

「てことはやつぱりハルは帰っちゃったの？」

「そうやろうね。惜しいことしたわあ」

「何が？」

「娘の旦那にええかな思て」

「ちよつと、ハルにはシルヴィアがいるでしょ」

「別にうちは一夫多妻が悪いことやとは思わへんわあ。そないなあん  
たはどうなんどすか」

「どうだろ？ いい友達だとは思ってたけど、そういう目で見たこと  
は無かったなあ」

勇者が元の世界へと帰還した日、大勢の人が天に昇る流星を見た。

ある者はその光景で全てを察した。

ある者は何かの吉兆だと喜んだ。

あるものは珍しいものを見た后感嘆した。

この日、この世界から魔王を討伐した勇者はいなくなった。

いずれ勇者の事を知るものもいなくなり、この世界から勇者につい  
ての記憶は無くなっていくかもしれない。それを惜しいと考えた戦  
士アイザックは実家の農作業の傍らに勇者の本を執筆し少しでも多  
く勇者についての記述を残したという。

僧侶ホリイは夫アイザックを支えながら、彼女もまた勇者についての教えを少しでも多く広めたという。

王女シャーロットは後に、自分に勝ったものを次期国王にと大陸一武闘会なるものを開催して国王を困らせたという。

魔王の娘フィーネは片田舎に移り住んで平穏なスローライフを満喫しているという。

起こした行動こそ様々ではあるが、皆が勇者に伝えたい言葉は一つであった。

——ありがとう！



俺は気が付くとベンチに座っていた。隣には俺の方に寄りかかって寝ているシルヴィアの姿がある。周囲を見渡すとその風景に見覚えがあった事に気が付いた。

実家の近所にある公園だ。

向かいにある駄菓子屋もそのままだ。

俺は帰って来る事が出来たらしい。

「おい起きろ。無事についたぞ」

「ううん……もう少しねかせてくれ……」

俺は苦笑しながらカバンに入れたあったローブを取り出して彼女に被せた。周辺に誰もいなくて助かったが、彼女の耳は少々目立つ。コスプレだと誤魔化すにしても限度があった。

「ほら、行くぞ」

「んう……」

不機嫌そうに眼を開けたシルヴィアを連れて二年半ぶりに近所を歩く。

「具合とか悪くないか？」

「少し体が重いくらいだ。これくらいならその内慣れる」

寝起きで不機嫌だったシルヴィアも俺の世界の目新しいものを見るとすぐさま驚き、はしゃいだ。ビルを何かのんジョンと勘違いした

り、車を魔物と勘違いして警戒したり、物量の多さに驚いたりと反応は様々だ。

「ハルの世界は色々と凄いな……」

「そうだな」

「？」

実家に着いた。

表札にも『筑紫』と書かれてある。引越とかさされていたら詰んでいたが、このままで助かった。

正直言うもう少し怖い。もう家族の中では俺は既に故人なのではないだろうか。自分を受け入れては貰えないんじゃないだろうか。そういう思いが俺の動きを鈍らせる。

「ハル、私がついてる。私は何があってもハルと一緒にいるぞ」

俺の不安を察してくれたのか、シルヴィアは微笑みながら固まっていた俺の腕を持って動かせてくれた。

俺は意を決してインターホンを押した。

さて、開いた扉から出てきた家族に何て言えばいいだろうか。

いいや、そんなことは決まっていたか。

———ただいま。